



Title	Vテオク再考
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 16-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

V テオク再考

金谷 由美子

1. はじめに

本研究では、Shibatani (2007) の「意味的に異質なコンテキストが文法化を促進する」という観点から、高橋 (1969)・吉川 (1973) の V テオク (トク) 形式 (以下、テオク) 研究を再考することにより、テオクを「ものや人のある位置に存在させてそのままの状態にする」(『明鏡国語辞典』より) というオクの語義を色濃く残す A 型 (例：入れておく) と、オクの文法化がより進んだソフトな当為的モダリティ形式としての B 型 (例：決めておく) とに大別する。A 型は、前項動詞が位置変化と意味的に近い他動詞に限られ、連続体でひとまとまりのイベントを表す語彙として見るべきであり、B 型は、位置変化とは異質な意味を持ち、自動詞含む多様な動詞 (例：言う、電話する) に接続し生産性が高いことが特徴である。

V テオクの分析を難しくしていた理由のひとつとして、前項動詞が位置変化動詞の V テオク A 型も、文脈次第では B 型に解釈できる (例：腐らないよう冷蔵庫に入れておく) という事実があるが、これまでの V テオクの議論では、この問題に納得のいく説明がなされてこなかった。本稿では、これを V テオクが当為的モダリティを表す形式としての文法化の中途過程にあることを示すものとして捉えるべきであると考えます。

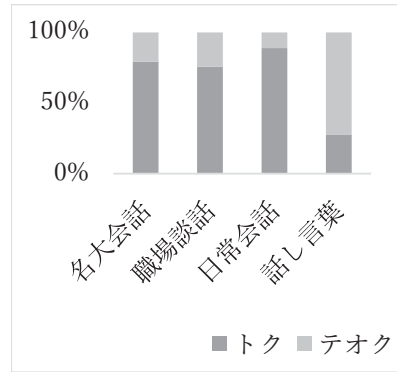
また、V テオクには、二次的な語彙化の例もいくつか見られる。A 型の例では、「伏せておく」は、物理的な位置変化の意味のほかに「秘密にする」の語義があり、「ほっとく (放っておく)」は「(人やモノを) 干渉しない、かまわない」の意味が辞書にも掲載されている。B 型においても、一旦文法化したテオクが前項動詞 V と一体化し、元の前後の形態素の語義の合算では出ない意義が生じる二次的な語彙化は起こると考える。B 型の例では、「警告する」の意味の談話標識「言っとくけど」や、保留するための「考えておきます」、「見返してやる」の意味の「見ておけ」等がある。

上記のように、本稿では、高橋 (1969)・吉川 (1973) を土台にしながらも、複合動詞研究における「語彙的」や「文法的」といった観点を取り入れることにより、V テオクのようなテ形補助動詞が複合動詞に対して平行性を持つという視点を分析に入れる点で先行研究とは異なる。

2. テオクとトクと調査対象

これまでのテオク研究が書き言葉中心であったこともあり、談話コーパスとドラマシナリオを調査対象の中心に据えた。本稿で扱う用例は、国立国語研究所が提供する『中納言』で調査できる口語コーパスのうち、『現日研・職場談話コーパス』『名大会話コーパス』『日本語日常会話コーパス：モニター公開版』から抽出¹した 1270 件が中心であるが、より確実に文脈がわかるドラマシナリオからも用例を引いた (以下、談話コーパスはそれぞれ『職場』『名大』『日常』と示し、ドラマシナリオのタイトルは《》でくくる)。なお、談話コーパスはいずれも小規模であるため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』も一部参考にしている。

図1に見られるように談話コーパスでは、縮約形式Vトク（ドク）が大半を占めている。縮約形が談話で定着していることは、文文化や語彙化が進んでいる表れと見られる。また、同じ話し言葉でも、レジスターによって形式が変わることが、『日本語話し言葉コーパス』で唯一Vテオクの頻度が高かったことからわかる。このコーパスは、9割が模擬講演等のモノログであり、他の談話コーパスとは性質が異なるため、調査対象から外すが、図1には、Vテオク/トクの出現形の比較のために入れてある。



(図1) テオクの出現形

テレビドラマシナリオでも同様にほとんどの場合、Vトクで出現する。例えば、2022年の秋に放送された《エルピス》ではVトクが9件、VテオクはLINEの打ち言葉として一回出現するだけである。同時期の《Silent》でもVトクが17件に対し、Vテオクはパソコンの打ち言葉として一回登場するだけである。つまり、この二つのドラマでは、話し言葉はすべてVトクになっている。それに対して、2016年放送《逃げるは恥だが役に立つ》では、Vトクが16件、Vテオクがそれを上回る20件と、比較的テオクが多く出現する。このドラマでは、Vテオクのような書き言葉的な言葉遣いが、主人公の男女二人が雇用主と被雇用者の関係にあるという設定や、堅苦しく話す人物であるということを表す役割語ⁱⁱのはたらきを果たしていると思われる。

3. 先行研究概観

現在多くのVテオク研究で使われている分類は、日本語記述文法研究会（2007）によるものであるが、ここでもVテオクは基本的にアスペクト形式として捉えられている。少々乱暴ではあるが、表1のようにまとめることができる。

日本語記述文法研究会（2007）がVテオクを「結果の維持」「事前の処置」の二種類に分類しているのは、吉川（1973）を踏襲しているのだろう。用例では、おおよそ、前者がアスペクト形式、後者がモダリティ形式に相当する。テオク研究の嚆矢である高橋（1969）は、書き言葉から収集したテオクをアスペクト形式（すがた動詞）とモダリティ形式（もくろみ動詞）の大きく二つに分けて議論している。アスペクトに注目した分析である吉川（1973）は、テオクを基本的にアスペクト形式としながらも、下位の意味分類にムード性が加わった「準備」「一時的処置」を設けるなど、高橋（1969）の枠組みを踏襲しているように見える。このように、高橋（1969）・吉川（1973）以来、日本語教育では、彼らの研究を出発点とする「準備・放置・処置」等の意味分類が引き継がれてきた。

注目すべきは、高橋（1969）と吉川（1973）では、アスペクト動詞としたものも、モダリティ形式の意味を持つことがあると明記していることである。高橋（1969）は、もくろみ動詞の「準備」の意味の説明において、「すがた動詞のばあいも、準備のニュアンスがあることがある」と述べ、すがた動詞は「状態つくりとその保持の意味がある」一方、もくろみ動

詞の場合は、「準備が基礎としてある」と区別している。吉川（1973）は、高橋（1969）でもくろみ動詞の意味である「準備」や「一時的処置」の意味は、アスペクト形式である（Ⅰ）からも（Ⅱ）からも派生するものであるとした。そして、そのモダリティの意味の派生は、動詞の語彙的条件や構文的条件によるとしたのである。

（表1）先行研究概観

	基本的意味	アスペクトの意味	モダリティの意味
日本語記述文法研究会 (2007)	基本的にアスペクト形式	【結果の維持】 対象に変化を与え、その結果の状態を一定期間維持する (例) ベランダに洗濯物をしばらく干しておいた。	【事前の処置】 ある目的のために、あらかじめ必要な行為を行うということを表す (例) 前の日にズボンにアイロンをかけておいた。
		【すがた動詞】 対象を変化させて、その結果の状態を持続させる動詞	【もくろみ動詞】 次に起こることがらのために準備的な動作として行う動作をあらわす
高橋太郎 (1969)	後のことを考えに入れて、する動きを表す動詞	(Ⅰ) ある時まで一定の状態を持続させること ※モダリティの意味を持つ場合がある。	(Ⅱ) ある時までにある対象に変化を与えること
吉川武時 (1973)	対象を変化させて、その状態を持続させること	※基本的にはアスペクト形式である。 「準備」「一時的処置」等のモダリティの意味は（Ⅰ）・（Ⅱ）から派生的に発生	

高橋（1969）・吉川（1973）以降も繰り返し、Vテオクの分析は行われてきた。現在の日本語学では、どちらに重点を置くかによって、テオクをアスペクト形式として扱う研究者（Ono1992・森山 2019・他）と、モダリティ形式として統一的説明を試みる研究者（菊地 2009・佐藤 2015・他）に分かれるように思われる。

影山（1993）以降、盛んに研究され、語彙的か統語的か等の議論がなされてきた複合動詞とは異なり、テ形接続の連続体の後項動詞は一律に文法的な補助動詞とみなされる傾向がある。このことが、この統一的な分析を目指す見方の前提にあるのだろう。しかしながら、Vテミルのミルに「目で見える」の意味はなく文法化しているⁱⁱⁱのに対して、Vテオクのオクには本来の「置く」の意味が比較的色彩濃いものとそうでないものが存在し、すべてが一様に文法化しているとは言い難い。本稿では、前者の「置く」の意味が比較的色彩濃いものをA型、後者をB型とし、分析を試みる。

4. 二種類のテオク

植田 (2017) の指摘にもあるようにテオクの使用が義務的な場合とそうでない場合がある。V テオク文の用例からテオクを抜いた場合の適格性や意味の違いを見られたい。用例は、雑談コーパスである『名大会話コーパス』『日本語日常会話コーパス：モニター公開版』『現日研・職場談話コーパス』から国立国語研究所『中納言』を利用して収集したものである。

- (1) (食卓)「お煎餅 {置いといたの/？置いたの} 見た？」「うん。」
『日常』 T004_001.5430.3090
- (2) (食卓)「牛乳飲み終わったらちょっと {取っというて/*取って} くれる？パック。」
『日常』 C001_007.2120.1070
- (3) (友人との雑談)「血の塊とゆうか、えーっと、しこりみたいなのが中にできちゃってるけど、(中略)でね、まあ、{ほっというて/*ほって} 大丈夫ですって言ってくれて」
『日常』 C001_001.9460.5460
- (4) (懇談会)「次の集まりを大体日程{決めといた/決めた}ほうがいいですよ。」
『日常』 T004_013.152850.86540
- (5) (会議)「はい、じゃ、{注文しというて一/注文して一}、車で取りに行く。」
『職場』 M04K011.15980.9720
- (6) (年賀状の処分方法を聞き)「じゃあ、余分に {買っというて/買って} もいいわけか。」
『名大』 data083.62700.40300

本研究では、前項動詞の意味によって V テオクを分類すべきであると主張する。(1) (2) (3) のように、前項が意味的に位置変化と関係する他動詞であるものを A 型とする。テオクが付加されることにより、位置変化を加えたあと、「そのままにする」というオクの語義を色濃く残した意味を添え、前項動詞と合成した上で、V テオク全体でひとまとまりのイベントを表す。そのため、A 型では、テオクを取り除いた場合に不適格になる（容認性が下がる、または、意味が変わる）ことになる。

(1) を「置いた」にした場合では「置く瞬間を見た」という解釈も可能であり、「置いといた」の方が自然である。(2) (3) は、二次的な語彙化が進み、前後の形態素の合算では意味がわからない。(2)「取っとく」は牛乳パックを捨てずに「保管しておく」という意味であり、「取る」ではその意味が全く出せない。(3) の「ほっとく」に関しては、「放置する」という意味から、さらに、「干渉しない」という不透明な語義が生じている。(3) が語彙として認識されていることは、辞書に掲載されていることからわかる。

A 型のオクの意味は、空間的な位置変化から時間的な意味へと文法化しており、前項動詞の位置変化にアスペクトを添えるはたらきをしている。但し、本稿では、テオクをアスペクト形式として「取り外せるもの」として扱う先行研究とは異なり、テオクが前項動詞と接続して V テオク全体でひとまとまりのイベントを表す語彙であると考え、A 型については、動詞連続などの語形成を用いない言語では、単独の動詞で表すことが多いと思われる。日本語でも漢語であれば一単語で表すことが可能である。例えば、「車を停めておく」は、英語

では park、日本語でも漢語では「駐車する」というひとつの単語で言い換えることができる。本稿では A 型の V テオクをひとつのイベントを意味するひとまとまりの語彙として捉えるべきであると考ええる。

一方、テオクを取り除いても表すイベント自体の意味が変化しない (4) (5) (6) を、本稿では、テオクの文法化が進んだ B 型とし、A 型から区別する。テオクが無い場合と比較すると、「すべきである／あった」「する必要がある／あった」という意味が含みとして伝わり、このような場合、V テオクは、「V ればいい」「V た方がいい」「V てもいい」のようなソフトな当為的モダリティ形式のひとつとして使用されていると考える。なお、本稿では、義務・必要・許可(禁止・不必要)を表すモダリティ形式を、当為的モダリティ形式と呼ぶ。過去の行為の当為性について述べる「V ておいてよかった」、行わなかった行為の当為性について反事実的に述べる「V ておけばよかった」、過去(行為時)の当為性判断を伝える「V ておいた」も含む。

A 型を「語彙的」、生産的な B 型を「文法的／統語的」と呼ぶことも可能ではあるが、B 型でも、「やめておく(しないことを選択する)」「言っておく(警告する)」のように多義化が生じ、二次的な語彙化を起こす場合があり、そのような場合はテオクが義務的にもなるため、アルファベットで A 型・B 型と呼ぶことにした。

A 型は、高橋(1969)吉川(1973)の言う「対象を変化させ、その結果の状態を持続させる」ことをあらわす V テオクに近い分類であるが、本稿では、その変化がなんらかの物理的な「位置変化」であるところがポイントであると考ええる。高橋(1969)吉川(1973)でも「すがた動詞」や(I)の分類の中で位置変化の意味を持つ前項動詞については触れられているが、それだけを集めグループとしてカテゴライズしたわけではなかった。

本稿は、大きく分けてアスペクト的なものと、モダリティ的な二種類のテオクがあるとみるのが妥当であるという点、前項動詞に着目している点で、高橋(1969)吉川(1973)の論を再考するものであるが、異なる点として、①V テオクの A 型は、他のテ形接続の補助動詞(例えば V テミル)とは異なり文法化に関しては、曖昧な段階であることを指摘する。また、この A 型の持つ曖昧さが、先行研究における分類に混乱を引き起こしてきたと考える。②文法化を促進する要因として、Shibatani(2007)の前項動詞と後項動詞の意味的な乖離があることを指摘する。最も先行研究と異なる点は、③語彙化と文法化という観点から分析している点であろう。文法化だけでなく、語彙化という観点を入れることにより、A 型は語彙としてテオクが取り外せないまとまりであること(これにも単語の組み合わせによって取り外しの可不可に濃淡はある)、さらに、④不透明な二次的な語彙化による多義化も起きていることを指摘する。③に関連して、⑤A 型が語彙的であるのに対し、B 型は生産性が高く文法的であるということを示す。⑥B 型は、ソフトな当為的表現であり、V テオクの意味を準備・処置・放任など細かく分けた吉川(1973)とは異なる。

5. 文法化と語彙化

5.1. 文法化と語彙化と V テオク

本稿では、テオクの「置く」の意味は A 型では、本動詞の「置く」の意味にもある「そのままにする」の意味を保持しているのに対し、B 型では「そうすべきである」という当為的

モダリティの意味へと文法化が進んでいると考える。文法化の定義については、「具体的な意味を持つ開いた類に属する語彙的要素 (lexical item) が、抽象的な意味を持つ閉じた類に属する文法的な要素 (grammatical item) に、または、すでに文法的な要素がさらに文法的性質の強い要素に変化する現象」(古賀 2015) とする。

比較的異論の少ない文法化に対して、語彙化に関しては様々な定義が見つかる。合成語に着目したものとして、『英語学・言語学辞典』(2015) では、①一塊の単語として、予測不可能で特殊な意味(例: honeymoon 新婚旅行)を持つものと、②慣用的に用いられることで語彙が確立すること(例: cash dispenser)の二種類を挙げている。いずれも、辞書に掲載する目安となるものである。

V テオクのような二つ以上の形態素の合成語の場合、『英語学・言語学辞典』(2015) で言う各要素から計算不可能な特殊な意味や狭い慣用的な意味でない場合は、辞書に掲載されないことになる。テオクの意味と前項動詞 V の融合が比較的緩やかであるため、通常は語彙とみなされない。また、これまでの日本語学では、V テ+補助動詞は一律に文法的であるとみなされてきた。それゆえ、ほとんどの V テオクは、辞書に記載がないのである。同じく動詞連続体である複合動詞とは異なり、V テオクの形式が語彙として改めて認識されることはなかった。かろうじて、意味が特殊化した(2)「取っておく」(名詞化してさらに意味が特殊化した「とっておき」も記載されている)と、(3)「ほっておく／ほっとく」だけが語彙として記載されることになる(『明鏡国語辞典』より)。繰り返しになるが、本稿では、(2)(3)のように、形態素の合算からではわからない不透明な意味だけでなく、ひとまとまりの語としてひとつの概念をあらわすようになった A 型を合成語として語彙化していると見做す。

古賀(2015)の「語彙化」の説明では、語彙化は、①ある意味要素と特定の形態素との体系的な共時的結びつきが定着すること(共時的語彙化)②語がそこに含まれる要素からは予測不可能な特別な意味を持つこと(通時的語彙化)の二つの意味で使用されているとある。そして、①を語彙化、②を二次的語彙化(不透明な意味を持つ)と呼んでいる。②は『英語学・言語学辞典』(2015)の①「予測不可能な意味」に該当するだろう。A 型の V テオクでは、「位置変化のあと、そのままにする」という意味が「テオク」という形態素の意味となり、前項動詞に意味を付加する共時的語彙化が起きていると考えられる。

5.2. 生産性の違い(生産性が高い B 型とそうでない A 型)

本稿では、5.1.で述べたように、A 型が語彙的であり、B 型は文法化が進んでいるという見方をしており、この点で、複合動詞との平行性があると考えられるものである。影山(1993)は、複合動詞の分類について、生産性による複合動詞の区分を提案しているが、この区分は現代語の複合動詞だけでなく、V テオクのような補助動詞と呼ばれているものにも有効であると考えられる。これについては、青木(2020)でも、現代語という共時態において、連用形後接型(複合動詞)とテ形後接型(テ形+補助動詞)の二種の「補助動詞」が共存することになったとしており、本稿では平行的な分析が成立すると考える。

Bauer(2001)では、形態素の生産性を測る絶対的な計算方法はないとしながらも、「あるコーパス内での 1 回語」が生産性を測る指標として注目されていることを紹介している。1

回語は、異なり語のそれぞれの頻度は低くてもさまざまな形態素に接続して使用されることを示す。すなわち、1回語の頻度が高ければ、生産性が高いと考えられる。これを踏まえ、日本語のさまざまな文法的形態素の用例を見ると、動詞に接続する形態素の生産性に関しては、スル動詞との共起がひとつの目安となると考える。様々な漢語動名詞、形容詞だけでなく、新規の外来語やオノマトペにつき、スル動詞自体の生産性が現代日本語においては非常に高い。

表2は、今回調査した3種類の談話コーパス『職場』『名大』『日常』にあったVテオクの前項動詞Vの頻度上位10位である。異なり語数284件中の3.5%に過ぎない上位10位がのべ総数1270件の47.3%、20位までで59.7%を占める。しかしながら、特定の動詞に接続する頻度が高いからといって、テオク全体の生産性が低いというわけではない。A型の前項動詞は、位置変化と親和性の高いものに限られ生産的ではない一方、B型は多様な前項動詞と結びつき、新規の組み合わせの創出という意味での生産性が高いことがわかった。

表2で言えば、「置く」「入れる」「取る」「ほうる」「付ける」がA型、「言う」「書く」「やる」「名詞+にする」「作る」^{iv}がB型である。頻度の高いB型のうち、「名詞+にする」は次に述べる生産性の高さを示すスル動詞の範疇である。

今回の調査では、「X+スル」動詞ののべ総数は202件、異なり語数は116件で、スル動詞が総異なり語数284件の4割を占めた。それぞれの頻度は高くなく、うち100件は一度か二度しか現れない。「確認する」等の漢語動詞はもちろん、謙譲の構文「ご紹介する」、「形容詞類+する」（小さくする、静かにする）、新語「スクショする」や、オノマトペについて「シュッシュする」等、多種多様なスル動詞に接続し、B型のVテオクの生産性の高さを示している。また、表2で8番目にある「名詞（句／節）+にする」という形式も生産性の高い「する動詞」の一形式である。用法は、(7)「同じようにまあ十時から十二時半ぐらいにしておいて」『日常』K002_004.33560.19230のように、「決める」の意味で使用されており、生産性が高い。7番目の「やる」も「する」のぞんざいな言い方であり、スル動詞の仲間としてカウントしていいだろう。

『現代日本語書き言葉均衡コーパスBCCWJ』を使用した中俣（2014）の調査では、「する」が頻度の1位にきており、「入れる」「言う」「知る」「置く」「とる」「放る」「つける」「覚える」「残す」が順に続く。これらTop10位のカバー率が30.17%である。中俣（2014）はVテオクを「生産性が低く、特定の動詞との結びつきが強い形式である」と結論づけているが、本稿では、Vテオクを生産性が低いA型（語彙的）と文法化が進み生産性の高いB型に分

（表2）前項動詞別頻度（1～10位）

と総数（1270件）に占める割合

位	前項動詞	頻度	割合
1	置く	134	10.6%
2	言う	91	7.2%
3	入れる	80	6.3%
4	取る	68	5.4%
5	書く	59	4.6%
6	ほうる	44	3.5%
7	やる	42	3.3%
8	名詞+にする	35	2.8%
9	作る	26	2.0%
10	付ける	22	1.7%

けて分析することによって、より V テオクの実態の解像度を上げることができた。そもそも「する」が 1 位に来ること自体が、生産性の高い V テオクの存在を示唆しているのではないだろうか。中俣 (2014) の調査対象である文法的なテ形補助動詞を含む形式 (V テアゲル、V テアル、V テイク、V テイタダク、V テイル、V テイルトコロダ、V テクダサイ、V テクダサル、V テクル、V テクレル、V テシマウ、V テミル、V テモラウ、V テヤル) のすべての頻度 Top3 に「する」が入っており、V テオクだけが生産性が低いとされていることは矛盾である。

比較対象として、異なり語が多いことで知られる語彙的複合動詞である V コムを、今回調査した 3 つの談話コーパス内で検索してみたところ、のべ数は 344 件、異なり語数は 73 件とかなりのバリエーションがみられたが、スル動詞との共起は一件もなかった。異なり語数が多いからといって生産性が高いわけではない。V コムの異なり語数の多さは過去の生産性の高さを示していると考えられる。

5.3. 二次的な語彙化 (A 型・B 型)

一旦、語彙としてまとめると、二次的な語彙化による予測不可能な意味を持つ多義化が起こりやすい。これは、語彙的複合動詞ではよく見られることである (例:「握り潰す」は (i) 何かを物理的に握り潰す意味と、(ii) 意見や提案、事件などを適切に処置せず、うやむやにするという意味)。このような複合動詞で見られる現象は、V テオクでも散見される。(2)

(3) は、物理的な位置変化の意味から多義化し、それぞれ (2) は「(捨てずに) 保管する」、(3) は「かまわない・干渉しない」という前項と後項の意味の合算からではわからない不透明な意味を持つようになった。「ふせておく」(公表せず秘密にするの意) は、「伏せる」だけでもその意味はあるが、「伏せておく」で使用された場合は、BCCWJ では 58 件中 41 件が「秘密にする」という意味で使われており、「伏せる」単独が物理的に伏せる、床にふせる (臥せる) の意味でも数多く使われている状況とは異なる。

(8) 「だから、そういう何、サークルの人間関係とかいろいろあるの。」

「伏せときたかったの？」

『名大』data025.197650.123610

一方、B 型も一旦文法化した形態素が何かと結びついて、それが一定の文脈で使用されるうちに、語彙化や慣用表現化することがある。例えば、辞書には掲載されていないものの、「言っておく」は、「言っとくけど」の形式で談話標識にもなっている。「言う」は、表 2 で見た V テオクの B 型では最も頻度数の高い前項動詞であり、全体の 7.2% を占めている。伝言や注意を頼む「言っという」のような形で通常使用されているが、通常の B 型の使い方のほか、(9) ～ (12) ように助言や警告、相手が知るべき情報を言う前後に談話標識的に登場する。『日常』では、3 件とも、このように、発話の最後に付け足す形で現れた。(12) のように、前置き表現として出る場合もある。

(9) 「そこのおばさんなんて言わないよ、今の子ほんとに。言っとくけど。」

『日常』T011_005.32190.18680

- (10) 「白系ロシアってそういう意味じゃないからね。言っとくけど。」「そうなの?」

『日常』T014_005c.2680.159

- (11) 「俺首ヘルニアだからね。言っとくけど。」「そうなの?」

『日常』T006_009.6900.3990

- (12) 「でもね、言っとくけどね、こういう話題はね、23の子には通じないの。」

『名大』data079.147460.91800

この他、ドラマや映画のセリフでよく耳にする「見とけ」「覚えとけ」は、それぞれ「将来見返してやる」「覚悟しろ」という意味で使われる。「やめとく」も諦めたり、断ったりする場面で使用されるひとまとまりの語彙であり、これらの場合は、B型由来ではあるが、語彙化が進行しているため、文脈によってはテオクを取り外すと不自然、または、意味が通らなくなってしまうのである。

「やめておく(以下やめとくで表記)」を詳細に見てみよう。「やめとく」は、テオクのない「やめる」とは異なり、継続中のことを中断する意味では通常使われない。『日常』では「やめとく」が活用形を含め33件あったが、継続中の動作を中断するのではなく、今ある選択肢を選ばないという意味でのみ使用されている。

- (13) (A、Bの二人がTシャツを染料で染める話をしている)

A「白いTシャツこれしかないけど」

B「あ、じゃあ、やめとこうか」

『日常』K005_021a.15020.8190

白いシャツが一枚しかないのに染めてしまうのはよくないという判断である。文脈が明瞭なテレビドラマでも確認しておく。

- (14) アナウンサーである恵那が冤罪事件についてのスクープ原稿を読むことになっている番組の出演について、上司村井が意見する場面：

村井「で、まあ、今日のお前の出演だけどさ、やめとくか?」

恵那「?」

村井「とりあえず、ここまでは、お前は〈アナウンサー〉だ。この事件を追ってたのも、特集を企画し、原稿を書いたのもお前じゃなくて、俺と岸本だった、お前はただ原稿をよまされてただけだ、って釈明が〈アナウンサー〉ならギリギリ成り立つ(中略)でも、今夜、お前がこの事件を追っていた記者としてニュース8に出れば、それはもう効かねえ。」

《エルピス》第6話

これに対して、冤罪事件の番組の続編が中止になる場面(15)や、取材を中断する意志を表明する場面(16)では、「やめる」が単独で使われている。

- (15) 冤罪事件の取材を続ける拓朗が先輩記者斎藤と話す場面：

拓朗「先週の会議でまた突然、制作中止っていわれたんです」

斎藤「へえ」

拓朗「第2回までの数字もいいのにやめろってことは、なんかそれ以外の理由なんだろうなって気はするんですけど…」

《エルピス》第5話

(16) 事件の関係者が死亡し、拓朗が冤罪事件の取材を諦めようとする場面：

恵那「ボツにするってこと？」

拓朗「はい。もうやめます。今度こそ。こういう…報道ごっこ。最初に村井さんが言った通りでした。僕は、どんな敵がいるかもしらずにジャングルで棒切れ振り回してたバカな子供でした。しかも自分じゃなくて、自分が引っ張り出した人を死なせました。」

《エルピス》第10話

「やめなさい」が現在継続中の行為を中断することを指すことが多いのに対して、「やめときなさい」は、これからする行為を選択しないように助言する表現にあたる。

また、「やめとく」は、断るときの決まり文句として日常生活でよく使われる。

(17) 飲み屋の前の会話：

風見「飲んでいけないんですか？」

百合「やめとく。」

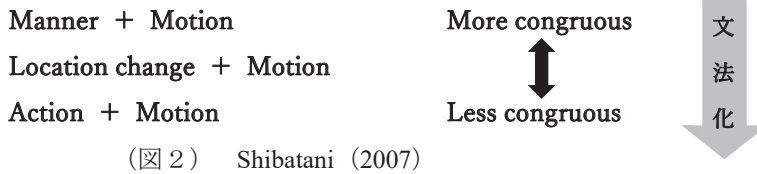
《逃げるは恥だが役に立つ》第5話

「やめとく」は、もともとは、Vしない方がいい/Vすべきではない、というB型のVテオクの当為的意味を持つ用法だったものが、高頻度使用过程中で、徐々に語彙化しつつあるとみることができるのではないだろうか。数は多くないが、統語的複合動詞でも似たような現象はある。「見直す」は「Vなおす」（もう一度Vする）という統語的な後項動詞を持つ複合動詞であるが、(i)もう一度見る、という意味のほか、(ii)再検討する(iii)それまで気づかなかった価値を認めて評価を高く改める、と(ii)(iii)の用法では、単純な前項後項の意味の合算ではわからない不透明な意味を持つ多義語となっている。

5.4. 文法化を促進するもの Shibatani (2007)

ここまで、テオクがA型B型に分かれることをそれぞれの特徴を中心に見てきた。では、どのようにして、このような意味機能の違いが生まれるのだろうか。また、同じVテオクという形式でありながら、その違いを私たちはどう見分け、使い分けているのか。

Shibatani (2007) は、Vテクル・テイクを例に、「Grammaticalization is facilitated in semantically less congruous environment (意味的に異質なコンテキストが文法化を促進する)」という仮説を主張している。この仮説は、動詞連続体に限らず、広く文法化現象に当てはまると考えられる。また、これは、通時的な文法化の進行過程だけでなく、Vテオクのように、共時的に文法化のレベルが異なるものが共存する現象もうまく説明することができる。“congruous”とは、動詞連続体においては、前後の動詞の意味する内容が同一イベント内に組み込まれやすいことを意味する。



Shibatani (2007) は、「Manner + Motion」(例:「歩いてくる」、「Location change + Motion」(例:「入ってくる」)、「Action + Motion」(例:「食べてくる」)という具合に、前後の動詞の意味的な組み合わせによってテクルの文法化の度合いが変わることを示した。寺村 (1984) の前後動詞の関係が並列か従属かによる分類に限界があることを指摘し、移動動詞の終着点を表す場所格が取れるかどうかや、否定のスコープの違いから、寺村 (1984) とは異なり、「Action + Motion」が最も文法化が進んだ形態であるとしている。

(18)「誰も歩いてこなかった」は文脈によって、「歩いて」の様態部分だけを否定する場合と、全体を否定する場合があるだろう。(19)「誰も部屋に入ってこなかった」は「入る」も「来る」も両方が否定される。本稿では、「入ってくる」で、ひとまとまりのイベントを表す語彙になっていると考える。それに対して、(20)「誰もご飯を食べてこなかった」では、「食べる」だけが否定のスコープであり、「来た」ことは否定せず、広い否定のスコープが不可能となる。(18)「歩く」と(19)「入る」は、「来る」という空間移動を表す動詞との意味的な近接性がある。それに対して、(20)「食べる」は「来る」という空間移動とは異質な意味である。このような前後の動詞の意味的な異質性、つまり、乖離の度合いが V テクルの文法化の程度の違いに関係しているとの主張である。

本稿の議論する語彙化の点から見ると、(18)「歩いてくる」ような様態と移動の組み合わせは、例えば英語のように様態と移動が一語で表せる英語では walk 一語で表すことができ、(19)「入ってくる」のような場所変化と移動の組み合わせも、enter のように、単独の動詞で表す言語も存在しているが、(20)の「食べる」と「来る」のような意味的に異質な組み合わせは、この場合は継起的な解釈になり、単独の動詞で表す言語は恐らく稀である。

ここで、吉川 (1973) の研究を振り返ってみよう。吉川 (1973) では基本的には V テオクは、どれもアスペクト形式と捉えており、(I)「ある時まで一定の状態を持続させること」に分類される前項動詞は、「立てる、そろえる、ならべる、掛ける、つみあげる、つみかさねる、つりさげる、いれる、しまう、のせる、つける、つなぎとめる、つなぐ、止める、はりつける、むすびつける、ためる、残す、保存する、うめる、おろす、くみあげる、掲示する、差す、蓄える、たてかける、漬ける、ふせる、ふりかける、ふりまく」等、ほとんどが位置変化と関係がある。本稿では、この前項動詞の特徴こそ、吉川 (1973) の分類の最も重要なポイントであったと考える。吉川 (1973) は、高橋 (1969) でもくろみ動詞とされているテオクについては、(II)「ある時までにある対象に変化を与えること」とし、様々な意味付けで分類した。

これに対し、由井 (1995) は、吉川 (1973) の V テオクの分析について、「前項動詞の種類までをも詳しく含んだ論考」であり、由井 (1995) では、あくまで、テオクのみから厳密に取り出した意味を扱うとしている。しかしながら、吉川から 50 年経った今、吉川 (1973)

の分析こそが V テオクの本質を捉えていたのではないかと思われるのである。

また、Shibatani (2007) では、この三つのパターンの間に中間的なものが多く存在すると述べており、文法化には共時的にも漸進的な側面があることに触れている。同様のことは、V テオクにも言えるだろう。本動詞としてのオクがとる場所格を V テオクがとるかどうかなを見てみよう。(1) は場所格をとる。それに対して、語彙化した不透明な意味を持つ (2) (3) では不可欠ではない。また、文法化が進んだ (4) (5) (6) は場所格がない文である。では、例えば、「書いておく」のような場合はどうか。吉川 (1989) では、吉川 (1973) よりも踏み込んで、本稿で A 型に相当する群に近いものを「設置動詞」としているが、「入れる」「のせる」「付ける」「貼る」等の位置変化動詞のグループに、「記録する」や「書く」も入れている^{vi}。「書く」や「記録する」は位置変化ではないが、どこに書くのか、記録するかという場所格を取り、行為の結果が文字として物理的に残る点で A 型に近い。(4)「決めておく」等に比べると、「書いておく」は空間的な要素が強い。このため、吉川 (1989) では、設置動詞の中に入れられているのではないだろうか。

- (21) (会議で)「いちいち連絡するのがたいへんですよね (中略) これからあの一、特に連絡はさしあげませんが一、そこの黒板には書いておくことにしますのです。」

『職場』 M06K011.3740.2340

- (22) (ノートテイキングのボランティア学生へのお礼のことばを毎回ノートに書いている聴覚障害のある学生に対して)「ひとつ書いておいて、毎回それを見せたら？」

《Silent》第 8 話

また、前項動詞自体が位置変化とは意味的に離れていても、「V させテオク」や「～ままにしテオク」の場合には、「そのままにする」という意味を持ち、A 型の要素もある B 型であるということが言えるかもしれない。

- (23) ペットの話を話している：「開けといていいのよ。自由にさせとけば。」

『日常』 T009_020.9710.5360

- (24) 「地元の人には怖いから行かないんだよ。そのままにしとけば観光の名所になったのにとか言って。」

『日常』 T014_001a.4200.2450

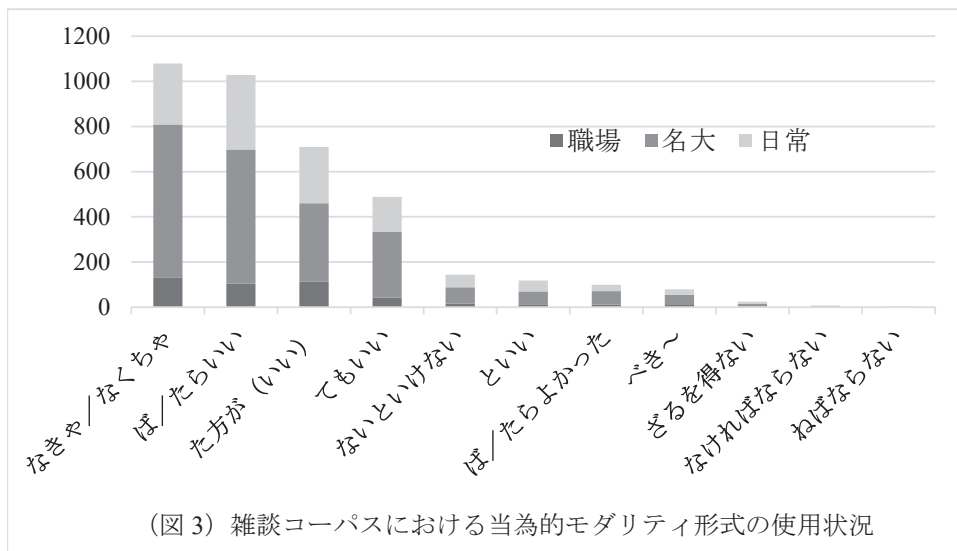
このように、V テオクは、決して二種類に竹を割ったように分かれてくれるものではない。また、高橋 (1969)・吉川 (1973) が指摘しているように、A 型のように「位置変化をそのままにする」という意味を持つグループも、文脈によって B 型のモダリティ用法が出てくるといふ複雑さがある。このことも、今まで V テオクの分析が迷走しがちだった理由のひとつであると思われる。

6. 当為的モダリティ形式としての V テオク (B 型)

6.1. ソフト化傾向にある日本語の当為的モダリティ形式

現代日本語においては複合的な当為的モダリティ形式が既に数多く存在する。口語コー

パスにおける使用実態を、雑談を多く含むコーパスである『日常』『名大』『職場』を用いて調査してみた(図3)。一般的に文法書等で当為的モダリティ形式として認められている「V {ねば/なければ} {ならない/いけない}」は『日常』『名大』『職場』では数件しかなく、使用が少ないことが予想される文語的な「V ざるを得ない」すら下回る結果となった。「V べき～」も思いの外少ない。その一方で、「V {なきゃ/なくちゃ/ないと} (いけない/ならない)」「V た方がいい」「V といい」「V {ば/たら}いい/よかった」等が、いずれのコーパスにおいても頻度が高い。許可の形式「V てもいい」も、談話では遠慮がちな助言や指示として使用されていることが多いように見受けられた。



(図3) 雑談コーパスにおける当為的モダリティ形式の使用状況

このような傾向が見られる理由として、形式が使用される場面での発話行為上の要請があるだろう。当為的モダリティ形式は、動作主が二人称の場合は指示・禁止・依頼・助言等の談話機能を持つ。このような場面では、対人機能を持った柔らかく丁寧な表現形式が求められ、新しいバリエーションが常に生まれる可能性がある。これら「ソフトな当為形式」の中にテオクも入れるべきであるというのが本稿の主張である。

6.2. ソフトな当為的モダリティ形式としてのVテオク(B型)

A型のVテオクでは、語彙としてひとまとまりのイベントであるために取り外せないテオクだが、B型では特別に語彙化や構文化が起きていない限り、テオク無しでも伝達するイベントの内容は変わらない。では、どんな違いが生まれるのだろうか。

- (25) 恋人と別れたのが自分のせいではないかと心配して会いに来た昔の彼氏との会話:
 紬「喧嘩したとかじゃないし、なんか、平和に、円満に別れたから。全然大丈夫だから。」
 想「どこかでゆっくり話せる？」

紬「これから仕事だから。なんかあるならまた Line しといて。」

想「仕事のあと時間ある？」

紬「だから。Line してくれればいいから。休憩のとき返すから。」《silent》第5話

この場面では、「また Line しといて」でも「また Line して」でも、どちらも容認度は高い。頻繁に会えない友人に別れ際に言うのなら、むしろ、テオクのない「また Line して」「また連絡して」「また電話して」の方がよく使う表現なのではないだろうか。ただ、ここでは、あまり話したくない気分である紬が「Line してくれれば、仕事の後で読んで返信する」という含みを、ソフトな当為的モダリティ形式 V テオクを使用することによって伝えているのである。テオクを付加することにより、相手に対して、私は今日会って話す気分ではない、あなたは Line するという手段をとるべきなのだと伝えているのである。それでもしつこく会って話そうとする相手に、結局はその含みを言語化して伝えることになった場面である。

6.3. テオクは時間的猶予を与えるのか (B 型)

頻度の高い「V として (ください)」のような命令や依頼表現における V テオクについては、テオクが時間猶予を与えるという主張がしばしばなされている。最初は、恐らく高橋 (1969) であろう。高橋 (1969) は、「もくろみ (モダリティ) 用法」においても「あるときまでに動作をおわるといふ、すがた動詞のなごりを持っている点は、『しておく』の『しておく』らしいところである」と述べた。これは、(5)「はい、じゃ、{注文しといて／注文して}」のような場合に、テオク文の方が、テオクがない場合よりも時間的な猶予があるように解釈できることを指している。テオクをアスペクト形式として論じる根拠のひとつにもなっているものだ。(26) のような例には当てはまるように見える。

(26) 大学生で就活中の田畑が契約社員の紬が正社員になる話をする場面：

田畑「青羽さん、社員なるってマジですか？」

紬「え？いや、まだわかんないけど、なれたらラッキーだけど。」

田畑「新卒もとってくれるか聞いといてくださいよ。」

《Silent》第1話

しかしながら、テオクが使用されればいつでも時間的な猶予があるわけではない。テオクは (4)「次の集まりを大体日程 (今) 決めといた方がいいですね。」(5')「この商品、今すぐ注文しといてください。」のように、今その現場でのことにも使えるし、(5'')「この商品、金曜日までに注文しといてください。」のように、いついつまでという期限付きでも使用できる。(25) でも、友人との別れ際には、むしろテオクがない「また Line して」の方が自然であることからわかるように、必ずしも時間の猶予がテオクの付加によって生まれるわけではない。

(27) 紬に高校時代の友人想への伝言を頼む場面：

湊斗「想に謝っとして。いろいろ勝手にしゃべって、多分なんも伝わってないから。

別に怒ってないし、大丈夫だからって、適当に説明しといて。」《Silent》第4話

これは、耳が聞こえなくなった高校時代の友人、想との再会場面で、気持ちを抑えきれず、湊斗が部屋を飛び出た場面である。すぐその紬のアパートに想がおり、Uターンして家に戻ってすぐ伝えてくれと言っている場面である。このような場合は特に時間に猶予があるわけではないだろう。

(28) 会社で自分のコップを派遣社員のみくりに洗えと言う上司が描かれる場面：

柴田 「これ、洗っといて」

みくり 「…(笑顔をつくり) はい！」

《逃げるは恥だが役に立つ》第1話

これは、今すぐの雑用の命令であり、いついつまでに書類を作成しろというような期限のある仕事ではない。

こうしてみると、テオクに必ずしも時間的猶予を与える機能があるとは言えないだろう。

(5)「注文して／注文しといて」(28)「洗って／洗っといて」のような命令依頼の表現において、しばしばテオクの付加によって時間的猶予が生まれるように見えるのは、むしろ、「注文する」「洗う」という動作動詞が本来持つアスペクトである将然性によって生じる対立ではないだろうか。モダリティ形式であるB型の場合、テオクが接続することによって、本来動作動詞Vが持っている将然性というアスペクトから解放されると考えられる。

6.4. 過去の事柄について使用されるVテオク(B型)

「Vておいた」のような既にイベントが完了している場合についても当為的と言えるだろうか。「Vておいた」は、「Vすべきだと考えてVた」ことが伝わる形式であり、過去(行為時)の当為判断を表す。欧語中心のdeontic modality研究では、当為判断は発話時であるという認識があるが、当為判断自体は発話時に判断するだけでなく、過去の時点でも判断することができるので、そうすべきだと思ったからやったと伝える形式が日本語にあってもおかしくない。あるいは、過去の行為に対する現在の当為的判断を示しているとも言える。

(29)「あたしはそれでT姉さんのために黒霧島(焼酎のブランド)も買っときましたから。」

『日常』T004_010a.31600.16590

(30)「あ、一応そのポイントだけがね、きょうはちゃんとあの押さえ、押さえときました。

短い時間だったのでね。」

『日常』K006_023.64990.36780

(31)「ちゃんとRちゃんにメールしといたよ。」

『日常』K001_003b.65910.37610

(32)「タダじゃなかったつつつて文句は言っといたけど」

『日常』T008_011.2740.1380

それぞれ、テオク無しの「買いましたから」「押さえましたから」「メールしたよ」「文句は言っただけど」と比べると、聞き手に対して、「やるべきことをやった」というアピールになっているのではないだろうか。

ドラマの用例も見てみよう。《逃げるは恥だが役に立つ》の主人公二人は偽装結婚をしているが、それが度々ばれそうになるというエピソードが挿入される。

(33) 津崎とみくりの偽装結婚を怪しむ職場の同僚について話す場面：

みくり「ん～でも何がそんなに怪しかったんでしょう。」

津崎「…恋するオーラが、無いと言われました。」

みくり「恋」

津崎「(恋) していないので、当然です。その場できちんと反論はしておきました。結婚した者同士が毎日ドキドキしていたら生活に支障をきたすし体にわるいことこの上ないと。」
《逃げるは恥だが役に立つ》第2話

「反論はしました」でも伝わる過去のイベントは同じであるが、「反論する」という、その場でやるべきことをやったという当為の意味が「反論はしておきました」には含まれる。

また、過去に行わなかったことに対する発話時の後悔を述べる形式でも、Vテオクは使用される。

(34) 歯痛が始まった場面：

みくり「半年前の自分を殴ってやりたい。あのとき治療しとけばよかったのに、痛み止め飲んでたら痛くなくなったからそのままほっといたらこんなひどいことに。」

《逃げるは恥だが役に立つ》第6話

(35) ケガをして動けない妻桜が夫が家事ができないことを嘆く場面：

桜「こんなに何もできない人だとは思ってなかった。(中略) もっと家事をやらせとくんだった。」
《逃げるは恥だが役に立つ》第8話

(36) 高校時代の彼氏である想と会っているところに、紬の恋人湊斗が出くわす場面：

紬「ごめんね。今日って伝えとけばよかった^{vii}。突然会ったらびっくりするよね。」

《Silent》第3話

高校時代の彼氏である想は、現在の恋人湊斗とも元友人の関係である。ひどく動揺している湊斗に前もって想と会うことを伝えるべきだったという反省の弁である。後悔の表現だが、すべきことをしなかったことを詫げる場面でも使用されている。

また、(34) (36) のような、「～ばよかった」「～たらよかった」「～たほうがよかった」のような過去に行わなかったことに対する後悔を述べる形式との融合、つまり、チャンク化は、かなり高い頻度で談話コーパスでも現れる。

(37) 海水浴場を思い出して「写真撮っとけばよかったなあ」『日常』T016_007.115160.65780

(38) 語学の勉強に関する話題で：

「ジェロンディフってなんだ。わー。ちょっとこれむずいわ。わー。学生ん時もう少し真面目にやっとけばよかったけど、やってももう何十年も昔だから絶対覚えてないよね。」
『日常』W009_002b.46820.26510

(39) レストランで：「ワインにしとけばよかったと思って。」『日常』C001_004.58210.33150

(40) マラソンも水泳もやらされなかった学校時代を振り返って：

「ラッキーって感じだったんですけど。当時は。今思うと、やっぱやっといたほうがよかったんだろうなって体力のなさに。やっとならばよかったって。」

『日常』C002_015.8910.5000

後悔だけでなく、「V といてよかった」のように、過去に行ったことへの当為を発話時の判断として表すこともできる。

(41) 「あつ、ワイファイ借りといてよかったって思ったから、そう、それにすることにしたの」
『日常』K001_019.40160.2367

(42) 「梅干しもある。」「買つといてよかった。」
『日常』K002_014.59810.32930

6.5. 当為的モダリティ形式と共起する V テオク (B 型)

6.4.の用例(34)～(42)でもわかるように、V テオクは、「V しといたほうがよかった」「V しとくんだった」「V {とけば/ときゃ} よかった」のような過去のしなかったことへの後悔や、「V といてよかった」という過去に行ったことへの当為を表すこともできる形式の中に取り入れられ、文法形式としてチャンク化している。

これはこれからすることに関する発話の場合でも同じで、「V とけば/ときゃ (いい)」「V といた方が (いい)」「V とかなくちや/なきや」という当為的モダリティ形式と接続するテオクの出現率は、『職場』『日常』で3割、『名大』で2割を占めることがわかった。

「V て (ください)」「V な (さい)」等の活用形の命令形や一般的な命令形式も、相手にそれをすべきだと迫るものであることから「当為」的な表現であると見做すと、さらに共起率が上がり、『職場』では5割、『日常』・『名大』で4割となる。テオクは、他の当為的表現と非常に相性がよく、構文化している、あるいは、しつとあると言ってよいだろう。

この現象の解釈には二通りがあり得るだろう。一つは、他の形式で当為の意味が既に表されているのだから、テオクそのものには当為的モダリティはないとする考え方である。もうひとつは、多くの共起表現は、類似の意味の形態素や語句が集まる現象であることから、テオクにも当為的な意味があってもよいという考え方である。言語の経済性は主として話し手としての言語使用者の便に沿ったものであり、逆に、多くの共起表現は聞き手側の解釈しやすさに沿うものである。

金谷(2018)では、ラシイが近年口語では連体修飾「ラシイ／ラシキ NP」以外では、伝聞用法にはほぼ傾いていることをシナリオ調査によって明らかにしたが、実際の用例では「～{と言っていた/って言う/と言われている/という噂(話)がある}ラシイ」のように、他の伝聞引用形式とラシイの接続した共起例が多く見つかった。文の構造は[[～と言っていた]ラシイ]ではあるが、ここでのラシイは「推量」ではない。ラシイがなくても伝聞であることがわかり、ラシイだけでも伝聞であることが伝わるのにも拘わらず、共起するのである。

類似の文法的意味を持つ形式がクラスターを形成するという現象は、少なくとも日本語においては珍しいことではない。此島(1973)は、「のみ」「ばかり」「だけ」という現在も「限定」の意味用法を持つ助詞について通時的な記述をおこなっている。限定の意味用法は、

上代からある「のみ」から中世近世になると「ばかり」へ中心が移り、さらに、近世後期から明治期にかけて「ばかり」から「だけ」へと移っていた。まだ「だけ」が単独では今のようにはっきりと「限定」の意味を持たない 18 世紀には、古歌の「のみ」には「ばかり」、「ばかり」には「だけばかり」を翻訳にあてている例（富士谷成章）がある。驚くことに、「だけ」の限定用法が定着したのは、ほんの 100 年程前のことである。興味深いのは、中間段階として、「ばかりのみ」「のみばかり」のような表現が出現していることである。現在では「だけ」は「だけ」だけで十分限定の意味を表す助詞として使用されるようになってきているが、初期の段階では、「限定」の意味として使用するために、共起表現に頼るといったことがあったのかもしれない。

現代語でも「だけ」は「だけしか～ない」「ただ／たった～だけ」のような共起表現を持つ。このような一見すると、言語の経済性とは相いれない現象も、聞き手のわかりやすさという観点から見れば不思議ではない。類似の意味の形態素や語が集まる現象によって、語用論的強化が起こり、新しい意味が定着したとも考えられないだろうか。語用論的強化 (pragmatic strengthening) とは、大堀 (2002) によれば、「モダリティや条件文といった、推論との結びつきの強い構文の発達を論じる上で有効な概念」である。発達過程にある文法形式は常に存在している。文脈からの推論だけでは弱い段階もあるだろう。その意味を補うために、類似の形態素が共起する、あるいは、逆にある形態素や単語、構文形式が共起することによって、推論の結果、新しい意味が生じるということもあり得る。

翻って、V テオクにおいても、他の当為的な表現とテオクとの共起頻度が高いことは、B 型が当為的モダリティ形式であることを否定するものではなく、むしろ共起表現と同様の意味を有している証左になるのではないかというのが本稿の立場である。V テオクは、現在明示的に当為的モダリティとみなされている表現である「べきだ」「ねばならない」ほどではないが、推論によって当為の意味が伝わる中間段階の形式だと言えるのではないか。推論による意味伝達が弱い段階では共起表現によって意味の明確化が行われ、さらにそのことによって、語用論的強化が進むと考えられる。

7. 統一的には説明しきれない A 型の V テオク

アスペクト形式として見ない研究者の場合、「後の時点における効力の発現を見越してその行為を行う」(菊地 2009) のように、本稿で言う B 型で V テオク全体を包括する傾向にある。このような統一的説明は、どちらのタイプとも矛盾しない抽象化を目指す一方で、包括的な説明に当てはまらない A 型の存在を無視しているように思われる。先行研究の多くは、本稿の A 型に相当するテオクの意味「V してそのままにする」を、文脈によって「放置」、あるいは、「準備」や「処置」の意味があると解釈してきた。

例えば、「置いとく」は、(1) のような文脈では「準備」あるいは「処置」とされるが、(43) のような場合は「放置」となる。(44) のような「入れとく」は「放置」とされるが、「ビールを冷やすために」という文脈があれば、「放置」ではなく「準備」とされてきたというわけである。

(43) (家族の会話) 「お骨があったらね、いつまでもそんなにうち置いといちゃいけな

いからって、京橋のおばさんという人が(略) 『名大』data129.47190.32030
(44) (食事を勧めて)「冷蔵庫入れとくとさ、味変わるからやなんだ。今食べほしい。」
『日常』T015_010.12280.7110

このように、A型は文脈によってテオクの意味が変わり、紛らわしい実態があることが、スキーマ的統一的説明につながったと思われるが、A型とB型では、明らかに意味的に異なると思える現象がある。A型は(43)(44)のようにその行為の結果が否定的な場合にも使用されるが、B型では不自然になるのである。

- (4') 「?決めといちゃいけない」
(5') 「?注文しといちゃいけない」
(6') 「?買っといちゃいけない」

否定との組み合わせは、(4'')「決めといちゃだめ?」「(5'')「注文しといちゃだめ?」「(6'')
「買っといちゃだめ?」のように、否定疑問文にでもしない限り不自然である。調査した用例中でも、A型では、(43)(44)のような否定的評価が行為にくだされている例が見つかるのに対して、B型では1件も見つからなかった。

これは、B型の場合、その行為Vを実行することが「望ましい」という意味が形式に含まれているためと考えられる。金水(2004)は、テ形補助動詞の形式全般に関して、「個々の文脈を取り込んで、推論を導出し、その結果に対して、動作主や話し手が『望ましい』『望ましくない』などと評価を与えるようなシステムである」という枠組みを示しているが、その観点からみると、Vテミルの基本的な意味は「結果が望ましいか望ましくないかが行為の実行前にわからない」ことを表す^{viii}のに対して、本稿で言う「テオクのB型」は「結果が望ましいことが予測されるためその行為を行う」ことを表すとも言える。

A型は、位置変化に伴うひとまとまりのイベントを表し、それ自体は良いも悪いもないため、テオクを含んだ行為が文脈次第で肯定的にも否定的にもなり得るのに対し、B型はテオクがあるために当為的な意味を持つことから「望ましさ」が含まれる。前項動詞が「諦める」のように常識的にみて否定的な意味を持つ場合でも同様である(「?決めといちゃだめだ」)。

(43)の「Vといちゃいけない」が言える前項動詞かどうか、A型とB型の意味分類上でのテストとなる^{ix}。

日本語記述文法研究会(2007)は、高橋(1969)・吉川(1973)らのアスペクト形式、モダリティ形式という2種類のテオクという説明を引き継いでいるように思われる。しかしながら、前者のアスペクト形式であるグループが意味にユレのあることを考慮しないままの分類は、結局、文脈次第で分類が変わるために、無理が生じてしまうように見える。日本語記述文法研究会(2007)では、前者を「結果の維持」、後者を「事前の処置」としているが、用例の分類の説明には疑問を禁じ得ない。

日本語記述文法研究会(2007)は、「ずっと」「しばらく」「1時間」「12時まで」のように維持期間の長さを表す副詞的成分と共起すれば、「結果の維持」用法であり、「事前の処置」用法は、「あらかじめ」「事前に」「先に」「前の日に」「今のうちに」等の行為が何かの前に

行われることを示す副詞的成分と共起することが多いと説明する。

※（ ）内の意味は日本語記述文法研究会（2007）による。

- | | |
|------------------------------------|---------|
| (45) ベランダに洗濯物を <u>しばらく干しておいた</u> 。 | (結果の維持) |
| (46) 換気のために窓を <u>開けておいた</u> 。 | (結果の維持) |
| (47) このシャツは <u>来年の夏までしまっておこう</u> 。 | (結果の維持) |

(45) (46) (47) は、前項動詞が位置変化と関係する本稿で言う A 型である。「前の日に」「会議に備え」「今のうちに」等を文脈に入れれば、何かの準備のための「事前の処置」用法になることになる。「あらかじめ」類の副詞があるときとないときの V テオクの意味の違いは文脈次第ということになる。

- | | |
|--|---------|
| (45') <u>前の日に</u> 、ベランダに洗濯物を <u>干しておいた</u> 。 | (事前の処置) |
| (46') <u>会議に備え</u> 、窓を <u>開けておいた</u> 。 | (事前の処置) |
| (47') <u>今のうちに</u> 、このシャツを <u>しまっておこう</u> 。 | (事前の処置) |

また、「まで」「までに」で「干しておく」の意味が分類されるという説明があるが、これがまさに、A 型の意味の曖昧さを端的に表していると言える。

- | | |
|---|---------|
| (48) 12 時 <u>まで</u> ベランダに洗濯物を <u>干しておく</u> 。 | (結果の維持) |
| (49) 12 時 <u>までに</u> ベランダに洗濯物を <u>干しておく</u> 。 | (事前の処置) |

(48) では、干し初めから 12 時までの期間、洗濯物を「干したままにする」という位置変化の状態をそのまま保つ意味である。(49) では、12 時までのどこかの段階で「干す」という作業をすべきであるという当為的な意味が出る。本稿では、この「干しておく」の 2 種類を、「結果の維持」と「事前の処置」に分類してしまうのではなく、「干しておく」は意味にユレはあるものの、位置変化動詞を前項に持つ A 型の V テオクとして分類する。

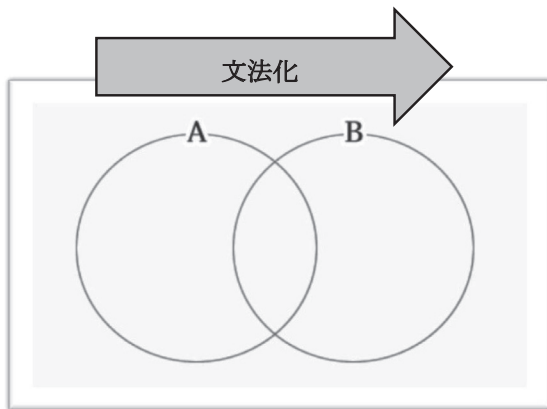
つまり、本稿の分類で言えば、「干しておく」「開けておく」「しまっておく」のすべてが A 型であり、それは文脈が変わって、当為的な意味が発生しても A 型として分類しようというのが本稿の立場である。

この A 型の意味上の紛らわしさは、文法化が段階的に進むことで、共時的に形態素の多義が生まれる可能性があることから説明できる。菊田（2008）は、V テオクの文法化について「対象物を意図的に『置く』、ということから、なんらかの目的をもって行われるという『ニュアンス』が生まれ、対象物を物理的にどこかに置かなくても、将来なんらかの目的のために何かを行うという意味を表すようになった」と説明している。文脈上得られる語用論的な推論が次第に V テオクの文法的な意味になっていったとすれば、空間的な意味を残す A 型では、文脈によってその解釈が左右されるのも自然なことであると言えるだろう。

Traugott & Dasher（2002）の Invited Inferencing Theory of Semantic Change（誘発推論による意味変化説）をわかりやすく説明している菊田（2008）の一節を引用する。

実際に通時的な変化を検証すると、A から B へと変化が起こるとき、通常は突然 A が B に再分析されるのではなく、その間に {A, B} = 両方の用法が並存する二重使用の段階 (layering) が存在することが知られている。すなわち、ある言語表現が明白に A という意味・機能を表す記号であった時期にも、文脈によって、話者が A という意図で用いた発話から、B という推論が可能な場合があると Traugott & Dasher (2002) は指摘する。そのような文脈での使用が繰り返されるうちに、推論 B は慣習的に高い確率で得られるようになり (= 誘発推論 (invited inferencing))、やがて語用論的強化 (pragmatic strengthening) によって、次第に言語的な意味と解釈されていく。そして、A か B の両義性や曖昧性が一定期間続いた後、A とは解釈できず B としか解釈できない文脈で用いられるようになる。この時点で、ある言語表現は明白に B という新しい意味・機能をあらわす記号として確立したと考えられる。(菊田 2008, 127-128)

これをテオクの A 型、B 型にあてはめて、図式化してみた (図 4)。位置変化と関係のある前項動詞と合成した V テオクの A 型が、文脈によっては、何かの準備や、やるべきこと



(図 4) 誘発推論による意味変化説の図式化

として解釈されるうちに、テオク自体に推論に誘発された意味が生じ、それが使用されているうちに定着した。そして、文法化したテオクは位置変化とは関係のない前項動詞にも接続するようになった。現時点では、A 型の意味と B 型の意味が共存しており、かつ、A 型の意味は文脈次第であるため、分類しにくい状況である。それが先行研究の分類がいつも何かしらの反論を招いてきた理由であると考えられる。

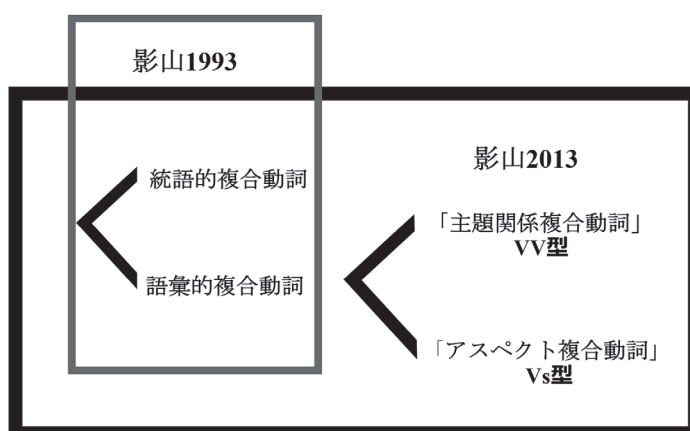
8. 複合動詞研究との平行性

本稿では、補助動詞の分析に用いられた語彙化、文法化といった観点を導入し、テ形補助動詞を分析してきた。これまで、V テオクを始め、V テミル、V テクル、V テイク、V テシマウ、等は「補助動詞」と呼ばれ、「テ+後項動詞」が文法化したものとして、連用形後接型の複合動詞とは別の現象として論じ分けられてきた。しかしながら、補助動詞の実態は、本稿で見るように、複合動詞研究とも平行している部分が多い。青木 (2020) は、テ形のみを補助動詞とする三宅 (2016) の見方には異議を唱えており、現代語の共時態において V テオクのような「動詞連用形テ+動詞」(テ形後接型) による補助動詞と、「動詞連用形+動詞」(所謂「複合動詞」) の連用形後接型の補助動詞は共存していると考えるべきであると述べている。

複合動詞は語彙的なものと統語的なものとに分類されるだけでなく、中には、「出す」のように同じ形式が語彙的な合成語を作る場合（例：差しだす）と、統語的な形式になる場合（例：食べだす）が存在している。本稿は、Vテオクは、完全に文法化しておらず、A型は複合動詞の語彙的（差しだす）に近く、B型は複合動詞の文法化が進んだ形式（食べだす）のように統語的だと考える。前項動詞「出す」は「出す」の様態を表し、意味的に近接性があるが、「食べる」と「出す」は乖離していることがこの共時的な多義の解釈を可能にしている。このように、テ形補助動詞と複合動詞における文法化／語彙化の現象は平行しており、Vテオクの分析に有効であると考ええる。

影山（2013）では、影山（1993）の語彙的複合動詞を（50）「太郎は虫を握り潰した」のような「主題関係複合動詞」と（51）「空が晴れわたる」のような「アスペクト複合動詞」に分類した。後者の（51）「アスペクト複合動詞」に近いものとしてテオクのA型を捉え直すことを提唱したい。以下は影山（2013）が示した新しい分類の「アスペクト複合動詞」の持つ「語彙的アスペクト」の内容である。

- a. 動詞が表す事象の完成に至る時間的な段階あるいは完成したあとの状態
（開始、継続、進行、終了、変化結果、未完遂など）例：見逃す、死に急ぐ
- b. 動詞が表す事象の強度や程度（一回性、多回性、再度性、強調、縮小、集中性、相互作用など）例：晴れ渡る、居合わせる



（図5）影山（1993）と影山（2013）による複合動詞分類の図式化

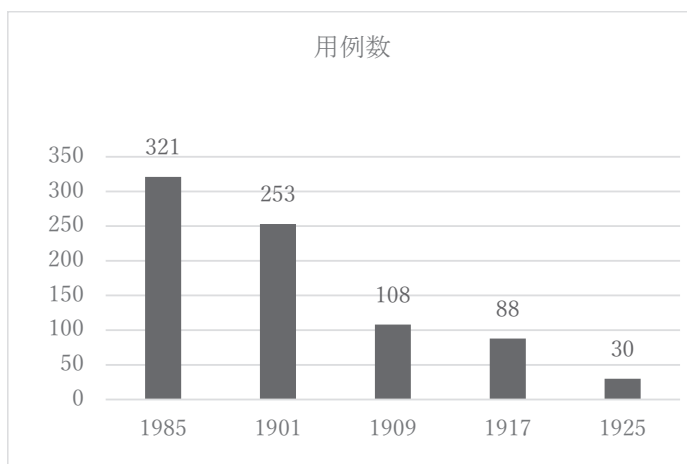
もちろん、複合動詞の分類がそのままあてはまるわけではないが、影山（2013）の語彙的アスペクト（Aktionsart アクツィオンサルツ：動作の様態（manner of action、動作の方式）という概念が形態素の語彙化として興味深い。語彙的アスペクトとは、完了・未完了といった時間的なアスペクトに限られず、広く「事象の展開の仕方」を表す概念である。これらの複合動詞は、前項動詞に限られていることから語彙であり、生産的ではないにせよ、語彙的

なまとまりの強さはやや薄く、後項動詞に共通の文法的な意味があるという点で A 型の V テオクに近い。それに対して、B 型は生産性が高く、統語的複合動詞に近い。

影山（2013）は、語彙的複合動詞もこうして大きく二つに分類することによって、他動性調和の原則の適用など、両者の特徴が異なることも示した。「アスペクト複合動詞」では、後項動詞の抽象化が進み、「主題関係複合動詞」に比べ、他動性調和の原則が緩やかになる。翻って、V テオクでは、通常すべて意志的な動作であるため、前項動詞に非対格自動詞は来ないが、語彙的な A 型では前項動詞は位置変化と関連する他動詞であるのに対して、文法化が進んだ B 型では「言う」「黙る」「行く」等の能格自動詞がくることができるとの違いがある。

9. V オクから V テオクへ

最後に、複合動詞と同形態である「動詞連用形＋動詞」である V オクから「動詞連用形テ＋動詞」V テオクへの通時的な変遷について見ておく。テ形補助動詞の出現は青木（2013）によれば、中世鎌倉・室町以降に起こっている。この時期には連用形の機能が整理され、語形成のみに縮小していったという。



（図 6） 太陽コーパスにおける「V オク」の用例数推移（永澤 2016）

永澤（2016）の『太陽コーパス』の調査によれば、近代に入り書き言葉においても V オク形式の使用が激減したことがわかる。古語の V オクという形式は、現代語では「書きおき」×「取りおき」「作りおき」「据えおき」という転成名詞として辛うじて残っているだけである。近世まで現代語に通じる様々な用法があった V オク形式が、衰退していくときに、V テオクにそのはたらきが受け継がれたと考えることは十分できるだろう。その役割を V テオクが担うようになったとしても不思議ではない。

現代語の複合動詞は、一部の統語的な後項の複合動詞を除き、基本的に閉じた語彙群である。オクと同じく位置変化と関係する後項動詞を持つ複合動詞は現在も数多く存在している。V アガル、V アゲル、V オリル、V オロス、V カクス、V クダル、V クダス、V ツク、

V ツケル、V イル、V イレル、V ダス、V デル、V コム、V コメル、V タツ、V タテル、V タオス、V トドク、V トドケル、V トル、V トブ、V トバス、V トマル、V トメル、V ヌケル、V ヌク、V ヨル、V ヨセル、等である。これらの形式が、語彙的な複合動詞として現在も使用されているのとは対照的に、V オクは一部の語彙を残して消滅した。永澤（2016）の調査を見る限り、V オクはテ形接続の V テオクに移行したと見てよいだろう^{xi}。

10. まとめと今後の課題

本研究では、テオクを二つに分類する必要性について述べた。

（表 3） 本研究での分類

	A 型	B 型
テオクの付け外し	不可 ※V テオクでひとまとまりのイベントを意味する。語彙的。	可
前項動詞の性質	位置変化と親和性のある他動詞	位置変化とは意味的に乖離している動詞（自動詞も可）
意味	対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることを表す。 ※文脈によってソフトな当為の意味を持つ（意味的に B 型に見える）	義務・必要・許可を表すソフトな当為的モダリティ形式
生産性	低い 決まった動詞との組み合わせ	高い スル動詞（漢語サ変動詞等）との共起も多く見られる
禁止表現との共起	可	不可／不自然
共起表現	場所格 時間を表す副詞／名詞	「V ればいい」「V た方がいい」「V てもいい」「V ておいてよかった」「V ておけばよかった」等、他の当為的モダリティ表現
二次的な語彙化（例）	ほっとく、ふせとく、とっとく、	やめとく、考えとく、言っとくけど、見とけ、覚えとけ

多くの用例に接した結果、この分類が有効であるという確信を持つと同時に、第 5.4 節で見たような分類しきれない難しさがあることも痛感した。この難しさは、また、複合動詞との共通点でもある。線引きは難しいにしても、「押しだす」「書きだす」「食べだす」における 3 種類のダスに、意味の異なりや文法化の程度の異なりがあることは明らかである。通時的な文法化による意味変化だけでなく、共時的な多義の解釈のプロセスにも、前項動詞と後

項動詞の意味が離れていればいるほど、文法的な意味になるという Shibatani (2007) の主張が説得力を持つ。

また、動詞連続体の研究においては、対照研究がヒントになる可能性がある。通言語的に、類似の語義を持つ語が文法化する際に似通った道筋をたどる場合があることが Bybee (1988) でも指摘されている。金吉任・ラッタナポンピンヨ (2017) が、「読む」「見る」「聞く」を意味するタイ語の動詞が、「V オク」に該当する「V+^l๓ (wái)」で使用された場合に、「V べきだ」のような当為的な意味になることを指摘しているのは興味深い。韓国語では、日本語に似た動詞連続形式「V (duda)/ V (nohda)」があり、いずれも、ちょうど本稿の A 型や B 型に分類できると思われる。さらに、本稿では、A 型と B 型の二分類に絞って論じたため、触れなかった一色 (2016) では「非難用法」^{xii}と呼ばれている譲歩的な定型表現である「V ておいて」に該当する表現「V (nohgo)」が韓国語にも存在していることも興味深い。これについては稿を改めて論じたい。

【参考文献】

- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的変化」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 pp.215-241. ひつじ書房
- 青木博文 (2020) 「“動詞連用形+動詞”から“動詞連用形+テ+動詞”へー“補助動詞”の歴史・再考ー」青木博史・小柳智一・吉田永弘 (編) 『日本語文法史研究 5』 pp.197-226. ひつじ書房
- 一色舞子 (2016) 「“—おく”の歴史的変遷—韓国語の “-twuta” との対照を視野に入れてー」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 3』 pp.213-240. ひつじ書房
- 植田志穂 (2017) 「テオクの性質と日本語教育における提出法」『日本語・日本文化研究』 27, pp.204-215. 大阪大学言語文化研究科
- Ono, Tsuyoshi (1992) The grammaticization of the Japanese verbs *oku* and *shimau* *Cognitive Linguistics*, 3-4, pp.367-390.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』 pp.215-241. ひつじ書房
- 金谷由美子 (2018) 「伝聞マーカーとしてのラシイー日本語教育の視点から」『日本語・日本文化研究』 28, pp.44-63. 大阪大学言語文化研究科
- 金谷由美子 (2019) 「気づきにくい学習者/母語話者間のミスコミュニケーション：V-テミルと韓国語 V-boda、タイ語 l๓๓-V-duu、クメール語 sa:k-V-mə:l の対照」『日本語・日本文化研究』 29, pp. 157-176. 大阪大学言語文化研究科
- 菊田千春 (2008) 「複合動詞『V かかる』『V かける』の文法化—構文の成立と拡張」『同志社大学英語英文学研究』 81-82 合併号, pp.115-165.
- 菊地康人 (2009) 『『ておく』の分析』『東京大学留学生センター教育研究論集』 15, pp.1-20.
- 金吉任・ラッタナポンピンヨ・プラッチャヤポー (2017) 『『ておく』の指導—韓国語・タイ語母語話者のための指導案に関する考察』『阪大日本語教育学研究』 8, pp.27-38. 大阪大

学大学院言語文化研究科・筒井佐代研究室

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店

金水敏 (2004) 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」 影山太郎・岸本秀樹 (編)

『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』 pp.47-56. くろしお出版

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居開友里子・白田泰如・柏野和住子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022) 『『日本語日常会話コーパス』設計・構築・特徴』

(国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書 6) 国立国語研究所

古賀浩章 (2015) 「語彙化」「文法化」『明解言語学辞典』 p.78, pp.199-200 三省堂

佐藤琢三 (2015) 「補助動詞テオク—意味・語用論的特徴と学習者の問題」 阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 くろしお出版

高橋太郎 (1969,1976) 「すがたともくろみ」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp.117-153. むぎ書房

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版

中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コロケーション』 くろしお出版

永澤済 (2016) 「複合動詞「V おく」の用法とその衰退」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 24, pp.27-44.

日本語記述文法研究会編 (2007) 「第5部アスペクト」『現代日本語文法 3』

藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」 藤村逸子・滝沢直宏 (編) 『言語研究の技法：データの収集と分析』 pp.43-72. ひつじ書房

森山卓郎 (2019) 「事態のアスペクチュアルな意味と『テイル』」 日本言語学会第158回大会 公開シンポジウム予稿集『アスペクト研究の新しい視座としての「テイル」研究—日本語学から一般言語学への貢献—』 pp.4-8.

三宅知宏 (2016) 「日本語の「補助動詞」と「文法化」「構文」」 秋元実治・青木博史・前田満 (編) 『日英語の文法化と構文化』 pp.237-270. ひつじ書房

由井紀久子 (1995) 「動詞オクの意味の抽象化過程」『阪大日本語研究』 7, pp.95-105.

由本陽子・小野尚之「第3節形態論・レキシコン」、中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄 (監修) (2015) 『英語学・言語学辞典』 開拓社

吉川武時 (1973,1976) 「現代日本語動詞のアスペクト研究」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のアスペクト』 pp. 155-327. むぎ書房

吉川武時 (1989) 『日本語文法入門』 アルク

Bauer, Laurie (2001) *Morphological Productivity*, Cambridge University Press.

Bybee, Joan. L. (1988) Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.247-264.

Shibatani, Masayoshi (2007) Grammaticalization of converb constructions: the case of Japanese -te conjunctive constructions. In J. Rehbein, C. Hohenstein, L. Pietsch (eds.), *Connectivity in Grammar and Discourse*. John Benjamins, pp.21-49.

Traugott, E. C., & Dasher, R. B. (2002). *Regularity in semantic change*. Cambridge University Press.

【辞書用例】

旺文社(2011)『旺文社全訳古語辞典』
小学館(2006)『精選版日本国語大辞典』
大修館書店(2011)『明鏡国語辞典』第2版

【コーパス用例】

国立国語研究所『中納言：名大会話コーパス』
国立国語研究所『中納言：日本語日常会話コーパス：モニター公開版』
国立国語研究所『中納言：現日研・職場談話コーパス』
国立国語研究所『中納言：日本語話し言葉コーパス』
国立国語研究所『中納言：現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』
国立国語研究所『複合動詞レキシコン』<https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>

【ドラマ用例】

生方美久(2022)『Silent：サイレント シナリオブック完全版』扶桑社
《Silent》(2022)フジテレビ系
野木亜紀子(海野つなみ原作)(2016)『逃げるは恥だが役に立つ シナリオブック』講談社
《逃げるは恥だが役に立つ》(2016)TBS テレビ系
渡辺あや(2023)『エルピス ―希望、あるいは災い―』河出書房新社
《エルピス―希望、あるいは災い―》(2022)カンテレ制作・フジテレビ系

註

- ⁱ 抽出方法は、短単位(キー：品詞大分類{動詞/助動詞}、後方共起キーから一語目：語彙素読みトク[ドクも含む])、(キー：品詞大分類{動詞/助動詞}、後方共起一語目：書字形出現形{て/で}、後方共起二語目：語彙素読みオク)
- ⁱⁱ 「役割語」とは、金水(2003)で言う「特定のキャラクターと結びついて、特徴ある言葉づかいのこと」を指す。
- ⁱⁱⁱ 「Vテ、ミル」ではない場合を除く。
- ^{iv} 「言っておく」「書いておく」「作っておく」は、それぞれVオクの形式だった時代でも使用されており、「言い置き」「書き置き」「作り置き」等の名詞化した語彙が辞書『明鏡国語辞典』『日本国語大辞典』にも掲載されている。もともとオクと頻度が高い組み合わせであったことがうかがえる。
- ^v 表2の8位「名詞句/節+にする」は抽出段階で202件あった「する」を異なり語に細分化する過程で、構文として残した。選択肢を名詞句/節としてとり、「～に決める」という意味を持つ構文である(例：12時半にしておく)。
- ^{vi} 吉川(1989)で、設置動詞として挙げられているのは、「書く、記録する、入れる、のせる、掛ける、立てる、積む、積み上げる、積み重ねる、そろえる、並べる、まとめる、広げる、漬ける、つなぐ、貼る、結ぶ、しまう、貯める、残す、保存する、捨てる」である。
- ^{vii} シナリオでは「時間伝えとけばよかった」であるが、放送のセリフを採用した。
- ^{viii} Vテミルの詳細については金谷(2019)を参照されたい。
- ^{ix} 5.4節で述べた吉川(1989)が設置動詞とした「書いておく」は、通常のB型に比べると、このテストでは容認性がさほど低いと思われる。つまり、A型に近いと思われる。

(21') 「その黒板には {書いておいてはいけない／書いていちゃいけない}

(22') 「ノートに {書いておいてはいけない／書いていちゃいけない}

また、「Vさせテオク」や「～ままにしテオク」の場合には、かなり容認性がある。前項動詞はB型タイプではあるが、テオク部分が「そのままにする」の意味であるため否定が可能となる。

(23') 「(ペットを) {自由にさせておいてはいけない／自由にさせといちゃいけない}

(24') 「{そのままにしておいてはいけなかった／そのままにしといちゃいけなかった}

^x 「書き置き」に関しては、一色 (2016) で近世において多数の使用が見られることが指摘されている。

^{xi} 但し、青木 (2020) によれば、複合動詞に機能語的な働きをする補助動詞用法があることと、その後テ形後接型のVテ+動詞の補助動詞になることとは直接的な関係は無いと見た方がよいということである。

^{xii} 一色 (2016) では、Vオクの意味をVテオクの現代の用法を日本語記述文法研究会 (2007) の結果維持用法、事前処置用法に非難用法を加えた三種類に分けたうえで、分析している。非難用法とは、「合格すると言っておいてまた落ちてしまった」のようなものを指す。

【キーワード】Vテオク、文法化、語彙化、当為的モダリティ、生産性

本稿は2019年度日本言語学会第159回大会（於名古屋学院大学）での口頭発表に加筆・修正をしたものである。